

草木染めと

戸隠地質化石博物館の関係

「草木染め」いまではなにげなく使う言葉ですが、昭和8（1933）年発行の「日本固有草木染色譜」という本によって初めて世に出ました。



文豪島崎藤村が序文を寄せたこの本は、手漉和紙製の豪華なもので、草木染の材料となる植物を写真入りで紹介しています。表装も草木染の織物が使われ、染色した絹糸なども貼りつけてあります。そこには一人の文士の熱い思いが込められ、館のある柵（しがらみ）地区にも深いかかわりがありました。日本では古くから植物を利用し、染物を行ってきました。その起源は縄文時代にさかのぼともいわれています。しかし、明治時代になって化学染料が輸入されるようになると、古来の染色は急速に廃れていきました。そんな中、昭和のはじめに世界大恐慌が起こります。生糸も暴落し、信州の農村は大打撃を受けました。この窮状を救いたいと、麻績村出身の山崎斌（あきら）が立ち上がりました。草・根・木の皮による染色、織物、手漉和紙を復興し、

農村の副業としようとして活動を始めます。彼は化学染料による染めと区別するため「草木染」という言葉を使いました。また、手漉和紙による織物を「月明（げつめい）織」、手漉和紙を「月明紙」と呼び、普及に努めたのです。昭和5年、東京銀座資生堂で、これらの展示会が開かれ、その役員には島崎藤村・有島生馬・竹久夢二らも名を連ねました。この活動をまとめたのが「日本固有草木染色譜」で、実は本に使われた和紙は当館のある柵地区で漉かれたものなのです。県下各地の和紙の中で、柵地区田頭の佐藤善一郎と田畑兵一郎両氏の漉いたものを山崎は絶賛し、月明紙と名づけたのです。こうした縁と歴史をもつ柵の地にある当館では、2010年以降毎年「草木染」のイベントを開催しています。みなさんも身近な植物をいろいろ試してみながら、自然の与えてくれる色合いを楽しみませんか。興味のある方はどうかご参加下さい。

